

平成4年7月2日

いま、誓い新たに 非核都市宣言10周年

## 『としま非核平和のつどい』

### 黒柳徹子さんを講師に迎え記念講演会

豊島区は昭和57(1982)年7月2日に、23区で初めて世界の恒久平和を願い『非核都市』を宣言した。以来、毎年、宣言の主旨にのっとり非核関連資料の展示や、講演会などを開催してきた。また、一昨年には区民が誇りうる平和の象徴として池袋西口公園に『平和の像』を建立した。

その宣言からちょうど10周年にあたる2日、多くの区民とともに、平和への誓いを新たにしようと、ユニセフ(国連児童基金)親善大使としても活躍中の俳優・黒柳徹子さんを講師に迎えた記念講演会を午後1時から豊島公会堂(東池袋1-19)で開催した。

題して『トットちゃんとユニセフと』。公会堂を埋め尽くした約1000人の区民らは、黒柳さんがユニセフ親善大使活動を通して接してきた戦争・飢餓・伝染病・災害などに巻き込まれている世界の子どもたちの想像を絶する悲惨な状況に、時折目頭を押さえながら熱心に聴き入っていた。入場無料。また、講演の終了後、広島原爆被害を描いた映画『黒い雨』(今村昌平監督)の上映も行われた。

#### 【講演内容要旨】

1. 多国籍軍の爆撃で発電所など電気関連施設を全て破壊されたため、電力で殺菌・供給されていた水道が完全に停止している上に、フセインが核査察を受け入れないばかりに、今だに経済封鎖されているイラク。もともと食料の70%、医薬品のほとんどを輸入にたよっていたため、イラク国内のほとんどの子どもが栄養失調で苦しみ、病院でも何の処置をすることもできない。例えば、粉ミルクは戦前の百倍の値段だという。乳幼児とその母親は、今も、そして今後も悲惨な状況に置かれ続ける。

栄養失調と聞くと、骨と皮ばかりの子どもを想像していたが、脳に栄養が回らず、脳の成長が停止してしまっただけで生き続ける子どもたちの姿を目の当たりにしたときは言葉が失った。あの猛暑の中で、今だに子どもたちが飢え、母親が泣いているかと思うと胸がつまる。

戦争の被害を最も受けるのは、その戦争にまったく罪も責任もない子どもとその母親である。

《次頁へつづく》

2. 発展途上国といわれる様々な国にも足を運んだ。日本で暮らしては想像もできないが、不衛生な水、教育を受けられない状況、予防注射が実施できないことによる伝染病の恐怖、地球上に住む子どもの85%がこうした悲惨な生活を強いられている。そして、毎年1400万人の子どもたちが死に続けている。日本が湾岸戦争の際に、多国籍軍に莫大な経済援助をしたが、そのお金があれば年間700万人の子どもの命を救えるという試算がある。そうせざるを得なかった国際情勢もあったのだろうと思うが、全ては大人の論理である。

繰り返しになるが、戦争・飢餓・伝染病・災害などの被害を最も受けるのは、何の責任もない子どもたちなのである。

詳細 総務課 総務係